昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十五年六月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十二巻 第六号
（通第三七二号）

目次

是非知らず邪正もわかぬこの身なり……近角常観……(1)
信を行く旅人抄……池山榮吉……(4)
病気見舞状集……多賀重治……(7)
御一代聞書抄（続・八）……井上善右エ門……(9)
自照日誌抄（22）……西元宗助……(12)
一道会の記……榊原徳草……(14)
念仏詩抄……木村無相……(19)
疾病と信仰……花田正夫……(21)

是非知らず・邪正もわかぬ この身なり

近角常観

是非しらず邪正もわかぬこの身にて
小慈小悲もなけれども
名利に人師をこのむなり

噫これ親鸞聖人の現存する法語の中最後の遺訓なり。御自身の懺悔なり、心中の直写なり、深刻を極めたる告白なり。これ実にわが御身にひきかけて、現代のわれ等、特に私自身のために遺したまえる金言なり、訓誡なり。

顧みればわが身こそ真に小慈小悲もなき身なり、小善小行もなき身なり。「蚊一つに施しかねる我身かな」。もし微かなる慈悲心あるが如く見ゆることあらば、これ偽善なり、修飾なり、賢善精進を現ずるなり、而して心中溢るるものは名利なり、内心張るものは名聞なり、利養なり。宗教家を自任し、信仰を標榜して立つ、人世最も醜きものは人師を気取りて東西に飛び廻れる名聞利養の我身なる哉。

誠に知りぬ、悲しい哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、愧ずべし、傷むべし。

と、誰がために遺したまいし御言ぞや。親鸞もこの不審ありつるに唯円坊おなじこころにてありけり、聖人の御同心なかりせば、我身愛欲の虜、名利の奴、茫々たる大海に迷い、有為の奥山に踏み入り、何れの所にか津梁を求め、何の時か解脱を得ん。真に聖人は真宗末代の明師なり。聖人の御導きあるにあらずんばいかでか仏智不思議に遇いたてまつるべき。いかでか選択本願の不思議を仰ぎたてまつることを得べき、多生曠劫いかなる深厚なる因縁のありけるにや。末代の今日、聖人の御教を蒙りて金剛の真信を得たてまつることを得る。

執持鈔に曰く。是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生ほどの一大事、凡夫のはかろうべきことにあらず、ひとすじに如来にまかせたてまつるべしと。噫、自然法爾の御力を仰ぎたてまつりて、ひとえに如来の御はからいにまかせ、

仏智不思議を仰ぎたてまつれば、我身は善悪、是非、邪正もわかぬ名利虚仮の醜虜なるかな。これ聖人の絶筆なり、天地を動かす懺悔なり、人類のあらん限り救済したまう徳音なり。

そもそも我等、善悪、是非の言をなすもの、みな自己をもって尺度とし、自覚をもって標準となす。

「彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼非ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非のことわりなんぞ能く定むべけん」

是れ聖徳太子の垂誡にして、恰も聖人の御自督とその揆を一にす。歎異抄に曰く。

「聖人のおおせには善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり。そのゆえは如来の御こころによしとおぼしめすほどに知りとおしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ如来のあしとおぼしめすほどに知りとおしたらばこそ悪しきを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそおおせはそうらいしか」と。

聖徳太子の遺訓に曰く、

「世間虚仮　唯仏是真」と。

噫、ますます前聖後聖その揆を一にす、真宗の渕源遠く聖徳太子に在りと謂つべきか。

善悪のはからいは何れも我見を尺度とすればなり。我身の悪しきを悲しむは如何にも殊勝の至りなれど、是れ悪しきものをたすけんとの如来の大悲を疑うものなり。仏如何ばかりの力ましますと知りてか罪悪の身なれば、すくわれがたしと思うべき。また我が行の善からんと勉むるは如何にも感心の至りなれど、未だ何れの行もおよび難きわが身なることを自覚せざるものなり。仏かねてしろしめして造無一善のわが身がために選択本願念仏を与えたまいしを知らざるものなり。

世の信仰を口にし、救済を説くもの唯信仰の一なることを知らずして、知らず識らず修養に力を加う、ために悪を悲しみ、善を勉めんとす、その志やよみすべく、その心や尊むべし、されどこれ仏智不思議を仰がざるなり、義なきを義とせざるなり。聖人曰く。

「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」と。

是れ唯念仏の一を見出したる姿なり。弥陀にたすけられまいらする有様なり。真の知識の仰せをこうむる態度なり。地獄におちたりともさらに後悔すべからず候とは、かくわ

が心をもってきめこみたるにあらず、自余の行をはげみ得ざるもの、何れの行も及びがたき我身なれば、このごとき唯一の救済、仏智不思議に遇いたてまつる、これを信ぜざらんとするも信ぜざるを得ざるなり。

何事のいましますかは知らねども、ただとうとさに涙こぼるる。

「ただ不思議と信じつるうえは、とかくの御はからいあるべからず候、往生ほどの一大事、凡夫のはからうべきにあらず、補処の彌勒菩薩をはじめとして、仏智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の浅智をや、かえすがえす如来の御ちかいにまかせたてまつるべきなり」

噫、われ苦しみて初めて煩悩具足の凡夫たることを自覚し、われつきあたりて初めて罪悪深重の我身なることを悟る。しかして初めてここに煩悶の声を挙げ、後悔の涙をそそぐ、何ぞしらむ、如来はかねて知ろしめして選択本願をたてたまいしにあらずや、煩悩具足の凡夫と仰せられたるにあらずや。ここに至りて我等は善し悪しの言を挾むべき余地を存せざるなり。よからんとはかろうも我身の価値を知らざるに座するなり。悪しきとて悲しむも如来の御存知なることを知らざるなり。いわんや悪しき者を助け給う願なればとて悪からんとはからう、ますます大悲の御心を知らざるものなり。いわんや他の悪をとき、善を評す、群盲の象を探ぐるが如く、鳥の雌雄を争うに似たり。聖人曰く

「ようようさまさま大小の聖人、善悪の凡夫のみずからが身をよしと思うところをすて、身をたのまず、あしきこころをさかしくかえりみず、またひとをよしあしとおもうこころをすて、ひとすじに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の誓願、広大智慧の名号を信楽すれば煩悩を具足しながら無上大涅槃にいたるなりと。嗚呼。

よしあしの文学をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりがほは
おおそらごとのかたちなり。

香樹院語録

凡そ誰でも我が心中をこしらえる事にかかりて居る故その心中はわがこしらえものなり。教える人も唯理屈ばかり教えて、心中を造ることに骨を折るなり。信心ということは、聞其名号信心歓喜の八字を我が腸（はらわた）とするばかりじやが、そう思う人の少いのは甚だ残念なり。

一連院師曰く。仏の力お一で、助けて下さると信ずる外には、聞其名号のいわれはないと聞いております。

師曰く、それでよし、それでよし。

信を行く旅人抄

今日は主として歎異抄の第二章をめどにとってお話をしたいと思います。が単なる講義ではなく、ただ二三、本文と幾分の関連ある思いつきを述べるにとどまることは、これまた前回とかわらないのであります。

魂の誕生地

「法然のおおせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからず候か」

明けておとどし、まだ岡山に居ました頃、津山の手前、岡山から二時間ほどで行ける誕生寺、法然上人の誕生の地そこへ参ったことがありました。岡山には十数年住んで居りまして、一度はと心がけていたのでしたが、機縁が熟したものですか、かねての志願を果すことになりました。

大方の桜の花は散ったが、まれにはまだ見頃のが残っている頃で、おちこちに見える桃の畠は赤く、菜種の花は黄いろく、春の色の濃くただよっている野辺を、汽車は私をのせて走って行く、その間私は何とも云えない霊感にしみじみとひたることが出来たのでした。私は思いました、今自分は、空間的には僅かに二十里たらずのところを行くだけであるが、時間的には七百余年の昔にさかのぼって、自分の魂の源に近づきつつあるのだ。なぜというと、もし法然上人がお生れにならなかったら、親鸞聖人—真宗の祖師としての親鸞聖人の出現もあり得なかったに違いない。

池山栄吉

曠劫多生のあいだにも、出離の強縁しらざりき、
本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし

七百年の昔、吉水の禅房での両聖人の會見は、親鸞聖人に「よき人のおおせをこうむりて信ずる」機会を得しめた。

もし親鸞聖人にこの機会が見舞わなかったとしたならば聖人をよき人と仰ぐ今日の自分も出て来よう筈がない。自分の今日あるは、ひとえに聖人のおかげであり、聖人の出現は、法然上人の誕生に依属する。信仰の流れが古今一つである以上、自分のからだの誕生は明治某年であったにせよ、心のそれは遠く七百年の昔にさかのぼる。法然上人の

誕生地は、即ち自分の誕生地である。こうして誕生寺に行く道すがら、時処を超越した偉大なる信の上の自分を観察することが出来たのでありました。

○

法然上人のほかに、もう一人、聖人が父のように崇び、母のように慕われたかたがありました。それは聖徳太子であります。太子の御廟は河内の磯長にあるとは、かねて聞いて居りましたが、住吉に住するようになってからは、これもやはり二時間ほどで行けることになりましたので、いつか参詣したいと思っていたところ、去年の大晦日でした、丁度伴が東京から帰省していましたし、岡山からも信友が見えましたので、これ幸と急に思いたって出かけました。その途中も、聖人が太子を和国の教主とあがめ、絶対他力の信仰を獲さして頂いたのも、全く太子のおかげであるとお喜びになったことや、

聖徳皇のあわれみて　仏智不思議の誓願に
すすめいれしめたまいてぞ　住正定聚の身となれる

の和讃などを思い合わせて、誕生寺詣りの際と同じように崇美な感をいだかせられたのでありました。

祖師にききて　しのびまつらん　聖太子
多々のごとくに　阿摩のごとくに

これはその途中の感を詠んだ腰折で、歌にもなんにもなっていないでしょうが、同じく偉人をしのぶにしても、その人と信仰のつながりがあると、ないとで、しのび具合に大きな相違があると思います。信仰のつながりのない偉人をしのぶのは、結局、その人のえらさをほめたり、てがらをたたえたりするだけのことですが、信仰のつながりのある人をしのぶときは、その人の心と自分の心とが、おなじ波動の脈が打つ。いかに時代と場所、境遇と性格を異にしていようとも、霊犀一点の相通ずるものがある。一つ泉から湧く同一念仏の流に掬む仲である。こうした感じの支配するのが、今人と古人とをつなぐ信仰独特の作用であってこれこそ実に信ずるものにのみ恵まれる感興であり、特権であります。

あと十年

聖人も磯長の廟へ参詣されたことがあります。それは聖人がまだ十九歳の時でありました。この参拝が聖人の獲信の上に一大転機となったのであります。聖人がわざわざ磯長へ参られたのは、もとより一時の気まぐれの遊山気分からではない。一つには、悲願弘宣の恩徳を謝するため、また一つには、出離解脱の引導を請わんがためであったに違いない。この時、聖人に夢のお告げがありました。それによると、聖人の生命はあと十年で終ると同時に涅槃のみやこに生れるということです。冥途の旅の一里塚が、十と数

えるしかないと聞いては、めでたくもあり、めでたくもなし、と感ぜられたかどうかしらないが、とにかく呑気にしている場合でない。おそくとも二十九になるまでには、成仏の準備をととのえなくてはならない。「十乗三諦の月、観念秋をおくり、百界千如の花、薫修年をかさね」学問に修行に、一生懸命いそしまれたのは、さもありなんことであったのです。

○

十年はたってみれば速いものです。聖人は二十九の春を迎えました。聖人の努力はいかに酬いられましたでしょうか？　成仏の準備は果してはかどったでありましょうか？　幸なるかな！この問題は否定されたのです。これが肯定されたなら、聖人は、もはや私達の聖人ではなかったのであります。

研学とは、険しい砂山を徒歩でよじのぼることでありました。修行とは、激しい流にさかのぼって小舟を漕ぐことでありました。いっぱし前に出たつもりでも、ある目標に目をやると依然として元の所でもがいているに過ぎない。進むはおろかすこしでも油断すると、忽ちあと戻りしてしまう。「俺は依然たる旧阿蒙だ、お利口さはもとのまんまだ、……俺達にはなんにもわかるものじゃないんだ」とのファーストの歎きは、聖人の唇からもれざるを得なかった出離生死のたねとしては、何一つ得られたという自覚のない中に、たった一つ明瞭になったのは、自分の器量の拙さでありました。「心つねに散乱して一心をうることかたし、身とこしなえに懈怠にして精進なることなし」頭燃をはらうような焦燥はありながらも、本当の精力を欠く自分をみつめて、つくづく「いずれの行もおよび難き身」と感じられたに違いない。聖人晩年の作にかかる

自力聖道の菩提心　心もことばもおよばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき

とある和讃は、この時の聖人の感じそのままではなかったでしょうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

断金の交り

兄弟、親のもとよりおのおの五百両の金を得て帰る途にて、弟、彼の金を棄てけるを、兄、何とてすてけるぞと問ひければ、弟泣く泣く語りける。我この金を持ちたる故に悪心起り、その五百両を奪いとりて千両になさばやと思う悪念起りぬ。されば、金のうたてきものなれば、棄つるなりとなん云いける。兄涙を流して、我も汝を殺してその金を奪い、千両となさばやと思いしとて、同じく渕にすてにける。世にこれを断金の交りというなり。

病気見舞状集

一　病間目録　足利浄円先生書簡

其後は病は如何がと、いつも案じておりますが、ただ案ずるのみにてどうする力もありませぬ。

私が案じておるより御互に、久遠劫来、如来様に案じられた身でございます。そうしたことの如来様の名告が、ただなむあみだぶつの一法句の名告りとなって、あなたの上にも、私の上にも顕現して下さってあります。

日本と米国、ところはことなって居りますが、御互に尽十方無碍光如来の御一心の中に、摂められてあるを御互によろこびたいことと存じます。そして。そして一切の心象にあるままに、御はからいにまかせて、この度、この御名に相遇うたことを嬉しく存じます。

念仏はあかるきものと聞こゆなり
とわの闇路を照らし導く
ためらわず行く筏かな　行く手には
渕もあり瀬もありと知るべし
忍耐のはての御顔を拝むなり
ほほえみ立たすこの御仏

二　御仏は枕辺に　住田智見講師

拝啓　先日は御病中失礼仕り候

御尋ねの件、一往ごもっともに候えども、自分の執心を破らんと力むは、わが手足にて地をはなれんとするが如し、決して出来るものにあらず候。

私共のそれではそれではとあともどりするを、大悲の御親様がそれでもそれでもと向いたまえる御姿が南無阿弥陀仏の御名に候。一念がなければならぬと力むのも自力の執心に候べし。さればこそいつまでたつても安心出来ず候、今はそうではなくぜひとも救わんと誓いたまいて、その大

（医）多賀重治集

願成就に御満足なる御喚び声が、そのまま我をたのめ、我にすがれ、必ず護る、引きうくるぞ、との切なる御言葉とならせ給えるなり。

私どもはこの御名あり、この御喚び声を聞くことの出来る光栄これに過ぎるものはなし。ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、信じたる一念に、仏智の不思議、願力の不思議として、必ず決定のよろこびをあたえ給う。これが信の一念に候。喜びも、決定もみな仏智を信ずる我に自然に与えらるる徳に候。よろこびや、決定は信にあらず、信のはたらきに候。

何卒御身の枕辺に立ち尽夜待ちたまえる、大悲の御親のましますことを忘れぬよう、念仏相続なされ度く念じ入り候。御親は何よりも念仏の声をきくことをお喜びなされることに候。右とくと御味わのうえ、なお不審あらばお尋ね下されたくそうろう。

三　病気見舞文　臼杵祖山老師

南無阿弥陀仏

御病気は苦しからんも、この苦しみの中にこそ大慈悲の御親はましますのである。

それはただおわしますというばかりでなく、あなたの御病気と一緒に同化して御親もお苦しみになってましますのであります。御親のこの御苦悩はただあなたの御病気と同じくお苦しみ遊ばすばかりでない。またあなたの今のこの御苦悩と、さらにあなたの未来永劫の苦悩に同情同化し給うは、あなたの今のこの病悩にくらべると百千万倍の苦悩をお受け遊ばしてましますのであります。されば病めるあなたは病めることによって、御親の救いを蒙り、悩めるあなたは悩める事によって御親の救いを蒙られて居るのであります。

時々出さるる。ああ苦しいという声の中に、またひとりひそかに悶え煩う思いの中にこそ、大慈悲はみちみちたまえることなれば、どこがどこまでもお慈悲ならざるはありません。さればああ苦しいの叫びも、また独り思い出の悩みも決して決してあなたの声、あなたの思いでなく、皆これお慈悲のあらわれでありますから、一糸一毛のへだてなき御慈悲の同化同情にあづかりたる幸福を思念すべき事であります。

身も南無阿弥陀仏なり
心も南無阿弥陀仏なり
さむるもねるも南無阿弥陀仏なり
湯薬臥具も南無阿弥陀仏なり
一切の事々物々一一みな南無阿弥陀仏

御一代聞書抄（続・八）

井上　善右衛門

仏恩を嗜むと仰せ候ふ事、世間の物を嗜むなどという様なる事にてはなし、信の上にたふとく難有く存じ喜び申す透間に懈怠申す時、かかる広大の御恩を忘れ申すことの浅ましさよと、仏智にたちかえりて、難有やたふとやと思へば、御もよほしにより念仏を申すなり嗜むとはこれなる由の義に候（第二二三条）

一

『聞書』の随処には嗜むということが、念仏者の自然の心情として語られていますが、その嗜むということが、世間通途の努力精進とは依り処を異にするものであることが明確に具体的に本条には示されています。

一般の努力主義は自己を中心として、自からが自からを策励するところに成立つのでありますが、理想は高くとも人間の心は濁り多きものですから、西洋の哲人も明言しているように「永遠の努力」に生きるより外に道はないのであります。

またそうした努力には深刻な障害がまつわりついてきます。第二二七条に「皆人毎に善き事を云いもし、働きもすることあれば、道俗ともにそれを我がよき者にはやなりて、その心にて御恩ということは打忘れて、我が心本になるによりて、冥加に尽きて世間仏法ともに悪しき心が必ず必ず出来するなり一大事なり」と述べられているのは、人間的努力の実態を余す所なく指摘していると言えましょう。

二

自我を中心とする努力には思うまいとしても、我が励みを無意識に意識する自負心が宿ります。たとえばある人に尽力し努力してあげているのに感謝の意を示さないと、その相手を責める心が湧きましょう。そうした心はどうにもならぬものであります。

古から伝えられている七仏通誡の偈は、どなたも御承知の通り「諸悪は作す莫れ、衆善は行い奉れ、自からその意を浄うすること、是れ諸仏の教えなり」とあります。「自浄其意」はこの四句偈の根本であり、この「自浄其意」ということが開かれなければ「諸悪莫作」も「衆善奉行」も却って「我がよきものにはやなりて……」という執我汚濁の縁由ともなりましょう。理性道徳が「永遠の努力」ということで始末する問題を、さらに徹底して凝視するところに親鸞聖人の精神があります。

大いなる宇宙的真実がこの私によびかけていて下さればこそ、執我の自己に安んじることが出来ないのです。それが阿弥陀仏（光寿無量）の本願の招喚です。人間が自我意識と誇っているその底に巣喰う執我の迷盲を如来の大悲は見捨てたまわぬのです。その本願のみ声が胸にとどくとき、始めて自我の殻が本願真実のなかに吸収されて、摂取光中の恩徳のおうけなさを感ずるようになります。

この摂取不捨の御恩というこころから生活の自覚に新しい光がさしそめます。それがいま「仏恩を嗜む」と語られている自然の心情であります。ですから「世間の物を嗜むなどというのは本来「欲也好也」と訓じられる言葉ですから「すき好む」意であり、平生つねに心がけてその事にいそしみ励むよろこびをもつことであります。即ち仏恩を仰ぐにつけてもその仏徳にいささかなりともいそしみ励んでその徳にあやかりたいという心根にほかなりません。

三

ところが人間の悲しさは、その徳にあやかりたいと願うておりながら、放逸の惰勢に流されてうかうかと過ぎさり、いつの間にか本能に操られている自分に陥るものです。ところが不思議な事に、その我が姿を照して下さっているものがあるのです。きっとその懈怠の自己に気づかせて下さいます。月の光がなければ木の影は映じないはずです。

気づかせて下さると同時に、ああ勿体ないという気持が先だつ。自責の鞭韃や理性の叱咤とは不思議な趣きの違いです。それはその時、仏智の真実がこの身に働いて下さるが故でありましょう。その様子を本条に「懈怠申すとき、かかる広大の御恩を忘れ申すことの浅間しさよと仏智にたちかへりて、難有やたふとやと思へば、御もよほしにより念仏を申すなり」と云されております。

まことに仏智の真実とは不思議なもので、理性の指示や反省では解決できないところに、大きな光と共なる統一が与えられ、大悲の摂取にもようされる前進の活動が開かれ

てきます。「仏法のこと我心に任せで嗜め……心にまかせてはさてなり、すなはち心にまかせず嗜む心は他力なり」（五五条）といわれ、また「仏法はこころのつまるものかとおもへば信心に御なぐさみ候」（四七条）とあるものその消息を語るものです。自策自励のごとくみえてその嗜みの源泉は異なるのです。しかもそれは他力が外から働くというのではなく、全く自己自身の中から法爾として湧き出る働きでありまして、他力真実における主体性ということがここに深く味われるのであります。

他力と他律性と混同しているような批判は、とんでもない誤謬であります。それは生命における絶対力としての他力を脳裏の理解にゆだねるからでありましょう。本条は縷々として仏恩と嗜みの織りなす真実の生命を明し、最後に「嗜むとはこれなる由の義に候」と結語されているのであります。

○

この身いまうずき八日の聖日にあえり
うららに桜さきおり

（昭五五年四月八日）

良寛和尚の讃歌

水の上にかずかくよりもはかなきはみ法をはかる人にぞありける

おろかなる身こそなかなかうれしけれ弥陀の誓ひにあふと思へば

くさのいほ寝てもさめても申すこと南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

こころもよことばも遠くとどかねばはしなく御名を唱へこそすれ

良寛に辞世あるかと人間はば南無阿弥陀仏と申したと言へ

伊藤左千夫の歌

よき人の心とほれるみ教にわが世百年楽しきを経め

天地のなしのまにまに鳴く虫や咲く百草や弥陀を知るらむ

自照日誌抄（22）

——「のれんと山門」——

西元宗助

四月号の「慈光」誌の各玉文、それぞれありがたく拝見。なお花田先生はご自分のものを、いつも一番あと廻しにして載せていられる。心うたれることであります。それにつけてもこの慈光誌、いつまでつずくことか。時折、毎号、毎号、がお別れと思うことでございます。

○

鳥取の千石文教氏は先生、本派のお寺を出て、鳥取市駅前で飲食店「いなば家」を経営し乍ら、かねて令室真知子さんの協力があつて畢竟院（宗教法人）を建立し、宗教誌（不定期）も刊行していられる。

その畢竟院に昨年の暮、招かれて一場のお話をさせていただいたのですが、若い人々も多く参ってこられて、ここには仏法が活々と生きているとの感を深くしたことであります。じっさい、ご夫妻とも御信心に燃えていられるようで、教えられること多大でありました。

ところでこのたび、はからずも真知子夫人から、ご尊父の故辛川忠雄師の十七回忌を記念に刊行された同師の遺稿集『のれんと山内』（鳥取市千代町二区八八三、畢竟院でも取りつぐ。定価八百円・送料百六十円）をいただいて一気に拝読、まことに感銘の深いものがありました。

わたしは辛川師のご生前、時折、ご書信をいただき、純一な御方という印象を強くしていました。そして今、その遺稿集を拝見して、晩年の源左同行と親交のあられたこと、それに花田正夫先生、花岡大学先生（龍大でご一緒）、それに西田辰正翁（希有最勝の士、たしか九十三才）らとも、ご縁の深くおありだったことを知って、あらためて因縁あさからずと追慕することでありました。

そのうえ『のれんと山門』と題されるように、辛川さんは鳥取の田舎の正覚寺住職でおありになりながら、乏しい門徒に依存することがつらくて戦後、病弱の身をもって鳥取に「いなば家」を開業されたのであり、今日の千石さんご夫妻はその飲食店を引き継いだ、いわば「のれんと山門」

の路線上におありであることをはじめて承知した次第。

なおこの書の中に、われらと同様な凡夫としての妙好人源左の一側面の伝えられていることは貴重。これについては直接、本書を読まれんことを読者におすすめする。終りに、辛川師の「さいごの言葉」（同書一二一頁）の一部を記しておく。

『貧乏寺に生れたお蔭で、お念仏に恵まれ、病床十年余の長きに耐えて、「いなば家」を開店経営し、一応強く正しく、恐れず、へこたれず、寺を守り子を教育して来た。ここに一書を残して如来の大悲を謝す。昭和三五年二月、忠雄』（註　昭和三六年一月一日死去、五六才）

さる日の読書会で、当番の大屋憲一先生が、故大河内了悟師の仰せをご紹介になった。それは、お念仏、一声でも救われるではない。一声で救われるのであると。

まことに感銘深いお言葉であるので、ここに書いてしるしておく。けだし「一声でも」というところには、お念仏は沢山称えるほうがいっそう救われるかもという自分をたのむ心持があるから。それに対し「一声で」というところには、本願力廻向の一念でおたすけにあづかり、そのうえはいのちのあらむかぎり御恩報謝のお念仏でありますから

○

家内がある朝、微笑しながら、今朝あけがた、ハッとする夢をみました。それはある方が、あなたはほんとにお幸せねと、おっしゃるので、お蔭さまでと首肯くと、でもお幸せでおありなさることが、―例えば人さまを羨しがらせて―案外、罪の深いことであることに、お気づきか知らんとおっしゃたので、ハッとして夢からさめましたと。

それで私、あんた、すばらしい夢をみたんだナ、それにしても、そのある方は、と尋ねれば、御近所の方であるようであるし、そうでないようであるし、そうかといって神さまでもないし、という。

そういえば、ものごころついた少女のころ、見ましたのは「お母さまを大切になさいね」という夢。これは大変シヨックでしたと、昔話をする。それは末娘がいよいよ嫁ぐ五月のさつき晴の、ある朝のことでありました。

○

例によって、**根本栄一**さんの感銘深い詩を一つ

一人一道

人間はみな
たれも通ったことのない
自分が　はじめて通る道を
一生かかってあるく。

一道会の記

次ぎに**稲垣久雄先生**の御話を伺いました。

西元先生が「稲垣先生はロンドン大学の仏教学の教授でありまして、稲垣瑞剣先生の御子息でございます」と紹介されました。私も稲垣瑞剣師とは、奈良の浄教寺での法話会で一緒にお話したり、夏だったので蚊帳の中に床を並べてやすませていただき、いつまでも話し続けた昔のことを思い出しました。

○

只今御紹介にあずかりました稲垣でございます。西元先生が昭和四年から七年までと云いますと私が生れて居た頃でございます。私がこちらに参った因縁を申しますと何時間もかかりますので、その一番大きな所を申しますと、私が生れた時から御指導にあづかりました井上善右衛門先生、種々と仏教の御指導を仰いでおります。

それからやや大きくなってきますと、西元先生が神戸の自照会に来られました。そうして御縁により念仏の法縁の中で育ってまいりました。ここへは二度目で、最初は井上先生のお導きで二十年程前にお邪魔しまして榊原先生に親しくお目にかかったわけであります。

先程、山田先生のお話にありましたが、ヨーロッパには念仏の声はあまり聞こえないという、淋しい事情にあるわけであります。十年程前からロンドン大学で仏教学を担当することになり、学生と接しているのですが、何とかヨーロッパの地にも念仏を解ってもらいたいという気持は秘めておったのですが、その機が熟しまして、三年前に現在の西本願の前門主様が来られた時に、そのずっと以前から一度文通がありましたオースチンという英国人があり、その人は小乗仏教から大乗仏教へ遍歴してこられて、最後は真宗という所に腹が決った方です。その人と相談しまして、前門主様が来られるのを機に真宗教会を作ろうという話をしまして、はたして二、三人来るか二十人来るかわからないが、三年前の八月に発足しました。その時は五、六十人

榊原徳草

集って来ました。日本人が十人位で他は白人ばかりです。
その時は前門主様のお話で簡単に終りましたが、愈々真宗教会として第一回の例会を月に一回開くことになり、その最初の会合で、皆様は何を要求しておられるかと聞いたのです。私共が考えますと、外人というのは理屈っぽい、理屈を聞きたいだろうと思った所が、異口同音に、御経を習いたい、御経を教えてくれというのです。私もびっくりしまして、その実、内心は嬉しかったのですが、理屈は本を読めば解る、所が御経を読むというような雰囲気を全然知らないのですね、私共は日本に育って真宗の空気、法座の空気、それは当然のようになっていますが、あちらの人々にはそれが全然わからないです。結局御経を読むということから、そういう空気に触れたい、こういう空気がわかったのです。早速御経はどういうのがよいかと聞きますと、余り長くないのがよいということで、歎仏偈をローマ字にし、又意味も訳してそれをつけて、読誦することにしたのです。読み方も「光顔巍々」を「光り輝やく」と和訳しますが、それは好まないのですね、やはり「光顔巍々」と棒読みを好むのです。それで歎仏偈を会毎に誦しましたが、も少し外のはないかといわれ、それで一寸無理かと思いましたが、正信偈があると云いますと、皆が喜んでそれを誦すことになり、本山からカセットが出ているので、それを聞きながら、「帰命無量寿如来」と唱和し、結局御経を読むということから学んで行き、そういうことを通じて真宗というもの、教理というものを学んで行くようになりました。理屈というものは最後まで徹底しないものが残るわけですね。回を重ねるにしたがって、来ている日本人も帰える人もあり、現在残っている者は英国人を母体として大体十人前後が、毎月参ります。
そういう中で真宗をどの程度理解しているかと皆様も思われましょうか、中には信じられない程徹底して――私この宣伝になって具合が悪いのですが、ヨーロッパの真宗ジャーナルを作ろうとしまして、英国人のフィッチャーという高校の先生とやっていますが、その人の言うことに――私共は何の気なしに称えることが多いが――あちらの人には念仏というのが珍らしくもあり又、味うことが非常に尊いものであることが、この人に出ていると思います。
どういうことを云ったかと申しますと、次ぎの念仏はどういう味いが出るかと思い乍ら念仏する、一つ一つ念仏を味ってたべてゆくと、こういうことです。考えてみると、日本を離れて居る私が、時折り日本に帰りますが、日本に帰って何が一番美味しいかと聞かれますと、その答は米なんです。お米が一番おいしい、そのお米そのものが美味しい、それが日本に帰ってくるとわかるのです。英国にも勿

論、米はありますが、その味は日本米のようでない。このことと同様に、毎日三度々々お米を食べてる人にとってはお米の有難味を感じません。毎日念仏称えている人々に果して念仏の味が本当にわかるかどうか。無意識で称え、或は身体に滲みついているから、意識的に味うわけもないわけです。あちらの人にしてみますと、一つ一つナムアミダブツと、どういう味がするかと、楽しみにしながら称えるというのです。
それからもう一つ申上げますと、これは英国の婦人ですが、アイルランドの婦人で、二年程前から文通しております。年令は五十四・五才ですが、まだ会ったことはなかったんですが、この八月に初めて会ったのです。そこでジャーナルを出しているから何か寄稿して欲しいと申しましたら、大体次のようなことを書いています。全然この方は、これを書いた時には、真宗のことを誰からも聞いていないのです。ただ本を読んで自分で味って、或は手紙をくれるので、返事を出していたのですが、そういうことを通じて味っている短い文章ですが、題が「願力の不思議な贈りもの」「アミダ様は、その不思議な願力の贈りものを持って来られました。そして私はこのような贈りものを受取る価値が全く無いと思います。永い間私は宗教の問題で――――（アイルランドはカトリックと争いを繰り返えしている国ですから）――闘争してきました。然し今私はアミダ様がその大きなお慈悲でもって私と一緒に居られるということを念仏を通じて感じます。私は非常な過去の宿業で生きているものであります。ですからこの人生はアミダ仏の本願、願いがなければ憐れな闘争で終ったでしょう。珍らしく私は私の感謝の気持を捧げ、そしてアミダ様の声が私の唇を通じてナムアミダブツと言われるのを聞きます」
まあこういう告白を述べて居られます。全然先生なしにも結縁があった方でしょうか。深い仏陀の強縁と申すほかはありません。
私のあちらの働きはそれ程大きなものでなく、ここにお集りの半分にも満たないのですが、結局、最近、先程山田先生が二十五年前にドイツのベルリンで種子をまいて居られたと伺いまして非常に尊いことだったと思います。二十五年前、山田先生がベルリンに居られた時に、ピーパーさんという方に、月に二回ある会のたびに歎異抄のお話をされ、最後にはピーパーさんが歎異抄そのものになりきったように、本当に身についた味いであったと聞きますが、そのピーパーさんは毎日歎異抄を読んで居られたと言います。毎日読んでも味いは新しい、自ら一生涯読み終ることはないだろうという感想を持って居られると聞きます。
私など歎異抄は毎日読みませんが、山田先生は、その外

に歎異抄をフランス語に訳して居られます。結局そうしたものを通じて池山栄吉先生の独訳歎異抄が生きているということを、二十五年後の私共も知るわけであります。私がこちらへまいりましたのも諸先生方のお導きを思いますと共に、今回の尊い追憶の会に参じ有難いことと思います。どうもありがとうございました。

ここで**川畑愛義先生**から「にわかに上京せねばならなくなったので、やむをえず欠席することになりました」という御手紙を披露いたしました。なお話する要点「人間性の原点に返えれ—経済優先、科学万能に幕—」という読売新聞の文化欄に掲載されたコピーを送って下さったので、左に記します。

アメリカを訪れるたびに、その地上、地下の資源の豊かさ、広い土地と長い海岸線、そこから産出する農産物、森林資源、又今日不足という石油も、オイル・サンド(油砂)は米国、カナダに無尽蔵で、やがて採算ベースに入ると聞く。然しこうした物の豊富が米国を幸福にするとは考えられない。現在インフレ、失業、離婚、青少年の麻薬、怠惰、セックス、非行、暴力の切実な様相か露呈している。「物は豊かになったが、心は貧しくなった」のは米国は我国の先輩格である。七十年代は物の時代だったか、八十年代は心の時代といわれる所以である。

米国の暗い印象の第一は、街頭の治安が悪化して、白昼でも都市で婦人の一人歩きは懸念される。七月のニヨーヨークの強盗、暴力は二百件を越したという。勿論明るい面も日曜日に教会へ行く人々、ボランチヤ活動、慈善事業も盛んである。しかしなんとはなしに米国の将来に暗雲を予感した。それで学識経験者と対談する機会を持って、サクラメントの有力新聞「蜂」(サクラメント・ビー)は私の所説を掲げ「日本の専門家は我々に警告した」という見出しで報道した。私の専門の公衆衛生から見ても、心因性の「心身症」が浸透して、精神々経安定剤の処方箋は年間二億枚以上で、薬の保証なしでは心の平安は出来ない人が多くなったといえる。

環境破壊も日本程ではないが徐々に進行している。これについても私なりに助言を与えたつもりである。環境の破壊も精神の荒廃もその背景と原因は同次元と云えそうである。それは①経済優先、②科学万能、③欲求本意で、自然に背を向け、自己の本質を見失った。これを百八十度転換して①人間優先、②科学活用、③心身調和に立ちかえらねばならなぬ。人間性の原点、自然に帰えれ、自己自身にもどれということである。

このような見地から、さきほど「瞑想のすすめ」という著書を出版した。これは寺へ行ったり、山に籠ったりでなく、一人になって心をしずめ、深層の自己を発見し、これと対話することだ。このような趣旨が一部の米国人にうけいれられ、英語で出版しようというハプニング(偶然)が起って、これも米国行きの一要件であった。サンフランシスコでは私事で恐縮するがテレビに出演し、東洋五千年の伝統という瞑想法を医学的に改案した瞑想法を実演する羽目になった。どれほど理解されたか疑問であるが、ただはっきり云える一つことは、物質的繁栄はそのままでは米国の真の幸福と直結しないだろうということ、また物におごるものは、やがて心を失うおそれがあるということ。米国人が明るい将来をかちとるためには、へりくだった心の内省と、地道な努力が必要と感じた。彼等自身の現状を率直に認識して再建への歩みをたしかにするか、さもなければ慢心と惰性を破るために、深刻な受難、たとえば天災、敗戦、経済的パンフリのようなものが彼等を襲う必要があるのでないかと逆説的に考えた、そしてこのことは現代の日本にも該当するかも知れぬと考え直してみた。終りに二先進の言葉を引用して私観の補充としたい。

「人の幸せは労働の中にある。しかも他人へつくす労働のなかに」—(トルストイ)—

「地上のものを手段と理解してこれにうち勝つ、これこそ地上における唯一の幸福である」—(カール・ヒルティ)

○

以上で諸先生方の御講話は終りました、それから相変らずの手製の精進料理の食卓の準備やら、緊張の解けたざわめきで賑やかになりました。準備が終って大勢の人々と共に広い書院に二列になってお斎を頂きました。

終って帰られる方や、残って法味を交わす人々、宿泊せられる人々と、夜に入るまで法雨滝々とふりつづくのでありました。

翌日には昨日の長崎の人々が訪れられて午前中法話のなごやかな温か味がただようのでありました。

今年の一道会は思いもよらなかった高名の先生方と多数の百数十人の参集追憶の会でありがたいことであります。

一期一会、なべてのものは無常の二文字で総括されます来年のことは期し難いが、その日に命あれかしと念じる私であります。

(五四年・十二月十七日)

念仏詩抄

木村無相

如来さまの業

香師おおせに
〝魚は水にすむが業なり
鳥は林にすむが業なり
獣は山にすむが業なり
われわれが
極楽を願わぬことも
これと同じく業なり〟

香師＝香樹院徳龍師

そのわたしを
どうでも極楽に
生れさせずばおかぬと
あるが
如来さまの業なり
とは——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

終り

香師おおせに
〝始めよくするもの
あれども
終りをつつしむもの
はなはだすくなし〟

信獲た当時は
殊勝げなれど

だんだんヂガネが
のさばって
名利にまけて
終あやまる

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

らるるの

香師おおせに
〝コドモは
育ちながら
育てらるると
しらぬ——〟

育つのではない
育てらるるの——
助かるのでない
助けらるるの——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

この私よ

香師おおせに
〝悪人女人が弥陀の正客と
知りたなら
己（オノ）がカラダを
なでてみよ——
五劫思惟の涙のかかりたは
この私よ——〟

このわたしよ
このわたしよ

ナムアミダブツ　ナムアミダブツ
ナムアミダブツ　ナムアミダブツ

疾病と信仰(一)

花田正夫

我々が病むと、治療に専念し、医者よ薬よと走り廻る。すこし快くなると喜び、思うにまかせぬと、人間以上の力、神や仏に祈る。人病んで母を呼び、人窮して天を呼ぶたぐいである。これが正しい信仰とは云えぬ、はたしてそうした神仏があるのであろうか、自分に都合のよい神仏を想像してそれにすがっているにすぎない、それは一時の気休めになっても、やがて壊れるのがおちである。

さて軽い病気はそうした努力でどうにか浮き沈みしながら過せるが、不治の場合、更に死につながる病になった時が問題である。

不治の病気の場合

先年亡くなられたSさんは終生どもりで苦しまれた、ことに慶応大学に在学中、このために卒業しても就職も出来ない、何とかして治したいと、どもり矯正所にも通い、或は自分がしっかりすればと、坐禅やら、種々の修行もされたが、結局水泡に帰して、絶望、死を選ぶまでになられた。

幸に近角先生を新聞で知り、御伺いして苦衷を訴えると、先生は一一を涙をもって聞きとられ、やがて、そうした業苦を持つ者をことにあわれんで下さるのが阿弥陀仏であると、ねんごろに教えられた。

Sさんは、自分の苦悩のありったけを涙をもって受取られ、その身にそそがれる弥陀仏の大悲をお聞きし、心の底が抜けたようになり、この深い御理解あるみ仏ましませば、世間からどう思われてもかまわぬと明るい広い心になった。そうしたことがしばらく続いていたが、またしてもどもりが苦になるようになり、もとの木阿弥になった。そこで再び近角先生をおたずねして「矢張り駄目でした、どもりがやみません」と申し上げると、先生はきびしく「どもりが治ると誰が言いました。どもりが治らぬそのやるせない苦悩をあわれんで、どこどこまでもお見捨てのないのが仏様です」と懇々とさとされ「これから日曜講話をよく聞きなさい」とのことで、初めて自分の聞法のあやまりを知らされた由である。今迄は、どもりを治そうために仏法を聞いていたので、換言すれば、仏法を利用していたにすぎなかった。法を聞くとは、仏様の思召しをきき、それを信順すればこそ、往生成仏の道も自然に開けるのであったと且つ懺し、且つ謝すようになられたのである。

Sさんが一度訪ねて下さった時、もう六十すぎていられたが、相変らずひどいどもりでしたが、このどもりのお蔭で仏法を聞くようになった、と念仏して居られた。

次に別府の篤信の眼科医、安波勲八氏の随感録に「盲人が盲人のまんま救われる」の一項がある。

四十二三の男の患者が六十余りの母に手を引かれて診を受けに来た。一方の眼は全く明暗を弁ぜず、一方はただ僅かに光が入るだけである。「種々手を尽したが経過がよくない、何とか治る方法はないでしょうか。福岡の大学病院でこんな処方を貰いました」とのこと。

暗室で検べると、両眼共視神経アトロヒーで乳頭は真白になっている、一方は瞳孔反応がかすかに残っている。「一方は無論駄目、他方もこうやれば治るという方法はない。何とかしてみようと云えば大学の処方による外はない」

「薬が毒にならぬのならやって下さい。こちらに滞在中だけでも治療して下さい」

それから翌々日やって来て「先生私の眼はよくなるでしょうか」「それが云えんのじゃ。唯何とかしてみよと云えばこうするだけのことだ。眼科医であっても眼をよくし得ないことはなさけないことですが、貴方の眼を見える様にすることは出来ない。然し貴方は眼が見えぬことの外に、そのために心の問題で悩んでおられる様である。夜間お話に来てくれませんか」と云うと、その晩母と共に来た、母の云うことによると、御里の宇和島で入院したが、病は悪化するばかり。そこで自分は真宗の信者で迷うことは嫌いだけれど子の眼をよくしたいばかりに迷い、土佐の山奥のでお籠りしてお祈りしたが何の効果もなく、大学でも思うにまかせぬとなると、別府の不老町でお灸で治してくれる所があるとのことで、そこへも通ったが駄目とのことであった。

私は、如何に患者が明を求める心が熾烈であるか、又医学の現今如何に無力であるかを痛感し、患者の母が子の眼を治そうために迷い歩く親心の有難さに感泣した。

「今さらとなって気休めは申しません。貴方の眼はお気の毒だがどんなことをしてもよくなりません。祈禱しても灸によってもよくならぬのだ。

今まで何とかしたらよくなるかも知れぬと、一点の望みのある間はお母さんに対し不平ばかりであったでしょう、然しどうしてもよくならぬことがはっきり分ると、このよくならぬ盲人のためにあちらこちらと歩き、よくならねば、この不自由の盲人に不自由のない様に暮らす方法を講じてやろうとして下さる、此処にいる貴方のお母さんのお慈悲の有難いのが分るではありませんか云々」

と感想を述べると、患者の息子さんは意外にも「ああそうでしたか、有難うございました。お蔭で胸が開けました。よくなりたいばかりで、親のお慈悲に気がつかなかった。ああそうでしたか、私はもう灸を止めて国に帰ります。もう決して迷いません」

と云うて、患者の顔には淋しい中にも喜悦さえ認めた。この光景を見て、お母さんは

「先生から息子の眼がよくなると言われたよりもうれしい」

と、何という力強い言葉であろうか。親はすでに眼のよくならぬことを知っている。然し息子が何とかしてよくなりたいとこの煩悶が解けぬから、子と共に迷い歩いたが、今子が親心、仏心に気付いて胸が開けた時、親の胸も開け「治るといわれたより嬉しい」という言葉が出たのである。眼の見えぬ者が、見えぬまんま救われる実際にふれて自分に教えられることが多かった。

更にずい分前のことであるが、阪大病院の人から、お目にかかりたいと申出ています、とのことで早速病室に伺った。そこに二十余りの青年に、祖母が付き添うていられた。私の顔を見るなり、祖母が

「孫が病気してながくなりましたが一向によくならず、それが可愛想でなりませんが私にどうしてやる力もありません。せめて仏様のお慈悲に気づいてくれたらと願っていました。そこで、祖母さんもお念仏申すが、お前も称えておくれ、その称える数だけのお米でお粥をつくってあげるから、とたのむと、素直に承知してくれました。

そうした日を続けていましたら孫が突然、お祖母さんのこころがよく解ったよ、もうお米を数えなくてもお念仏申すからな！お念仏はありがたいね、と云うようになり、一緒にお念仏申しながら養生しています。この孫が、どなたかお念仏を喜ばれる方にお会いしたいと申しますので、御願いいたしました、有難うございます」とのことであった。早速、病人に「何かお尋ねは」と聞くと、「私は何も知りませぬが、唯お念仏が有難いので、そうした方のお話がお聞きしたかったのです」と微笑してお念仏していられた。ここに長患いの人の救いを実地に拝見したのです。

更に、喉頭癌で剔出手術をうけられた故・高千穂徹城師が某老人の同病者へ答えられた一文を抄出させて頂こう。

「まことに私の存在は、その一秒一秒が死に直面している。真実の宗教は、この生死的存在としての私の苦悩を解消するもので、単に生きることだけのために利益を与えるのでもなく、また死の恐怖だけに力を与えるものでもない。生死は一枚のもので、生の依るところと死の帰するところを明らかにするものである。

私の現実は生死流転であり、それを断ち切る力は私にはない。まことに生と死とは苦悩となって私の上に覆いかぶさっている。さらに私自身は真実にそむき、悪と罪との積み重ねで救済の縁は一つもないのである。（中略）

私がよい加減の気持で毎日を過している間は、少しも気にならないが、種々の災厄や苦難につきあたり、行きつまった破目になると、自分の全体を投げ出すよりほかはない。この行き詰りを開いて、更に新らしい力を与え、前途に光を点ずるものは、この世の力ではなく、あの世の光である。私達はこの光に照りかえされて、自分の姿をみかえし仏様の願力にうちまかすほかに道はない。

仏さまの浄土を、うるわしい七宝荘厳の世界と説いてあっても、私たちはとうていその形相的世界を視覚することはできない。念仏とは、私が仏を念じ、浄土を観ずることではなく、私が仏の本願に遇い、仏の名号を聞信することによって、深い自己内省と、それにもとずく生活態度の転換される事実である。それはこの世からあの世へではなくて、逆にあの世からこの世への道がひらかれることによって、彼岸の浄土が現世を照らす光の根源となるのである。即ち、現世は、後世としての浄土をもつことによって、真実の現世となり、その浄土は常に私たちに働きかけ、現実を理解する力となるのである。

「私が七十五年の生活で知らされたことは、人の世の空しさと、人の心の醜さであった。それ掘りさげて行くことによって、私は仏の本願という地下水につきあたったのである。仏の大悲は私の無明煩悩のやみの奥深くを照らす光である。この光によって煩悩が煩悩と知らされ、そこから無明のやみに、ほのかな光がさして、私が仏の心光の中にあることに気づかされたのである。」

以上の例によって知らされることは、病がすこし快くなると浮かれ、よくならぬと打ち沈む、そうして生死の大海にあってたえず浮きつ沈みつしながら流転する私共に、絶えずそそがれる仏の大悲心のましますことを知らされる時、行く方に光がさすのである。「衆禍の波転ずる」世界である。

あとがき

芭蕉翁が古都奈良の唐招提寺にまうで、鑑真大和尚の御像を拝した時の句に

青葉して御目のなみだ拭はばや

とあります。和尚は天平の昔、わが入唐僧普照の懇請によって、其徒百八十四人と共に六回の大難を犯して来朝し、戒律を伝えられた人でありますが、渡海の際、病によって両目が失明しながらも、よく大任を遂げたのであります。最近に〝里帰り〟されて、中国の人々に歓迎されたことが報道されました。日支親善の上に大きな働きをせられたことにあらためて感銘深く徳香を仰いでおります。

さて最近誌友の方で病床につかれているとのお知らせを沢山いただきますにつけ、岐阜県垂井町表佐の多賀重治氏（八十八翁篤信の医師）が集録された名師の見舞文を抄出させていただきました。又、「疾病と信仰」の題で、拙文を三回にわたって掲げさせていただきたいと思います。

徒然草に兼好法師は「花は盛り、月は隈なきをのみ見るべきかは、散り行く梢に花をしのび、たれこめて月を憶うまたおもむきあらずや」と云っておりますが、大切な健康を失って、その暗い所をかねてから照らし続けていて下さった仏様の慈光を仰ぎ、老病死の苦の海に、人間の力の限界を越えた仏力のたのもしさも知らされますことでありましょう。「病もまた善知識なり」と言った永観律師の心境にも同心させられますことであります。

次に明るいニュースとして、五月八日に西元先生の末娘さんが三河の寺に嫁がれることになり、挙式もとどこほりなく終られました。

ネンブツノミチヅレウレシ　ワカバドキ

と祝電させていただきました。

次に四月号で御紹介いたしました、「常照」松村繁雄遺稿集を御注文の方は、山口市仁保上郷三三三、仁保妙華会、山本永一宛、振替・下関一〇一八二に定価七百円、送料二百円お振りこみ下さいますように、山本様から申出がありました。

＜御　案　内＞

○毎月第一、三日曜、午后一時半、名古屋一道会例会。
南区駈上町二の八六　鬼頭氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車。東入ル三筋目、左角。地下鉄、新瑞橋終点下車。名鉄、呼続下車。徒歩。

○毎月二十四日、午前・午後。昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市バス、又は御器所通り下車。地下鉄、御器所下車。

○毎月七日、午后一時半。（日曜は変更）
尾西市三条板倉、蓮光寺、修道会。
名鉄、新一宮駅よりバス、西三条下車。

慈光　第三十二巻　第六号　昭和五十五年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号　四五七